

明治期における日本の国民性に関する論争と 魯迅の「国民性」思想

The controversy surrounding the notion of national character in Japan during the Meiji period and Lu Xun's ideology regarding national character

崔 子 晧*

Zixian CUI

はじめに

明治期、日本政府が変革を行った際に、大量の西洋文化や文明を受け入れたために、日本では「自国の伝統を忘れ、西洋文明の影に覆われそうになる」傾向が現れた。日本の知識人らは、自国が完全に西洋化されることに抵抗するために、「自分たちの伝統を忘れてはいけない」と訴える文章を書き始めた。これは、日本の国民性論（当初は日本人論と呼ばれた）の出発点と考えられる。民衆に向けた政策の実行及び新聞・雑誌の普及に伴い、国民性論は日本で広く浸透していた。また、アジアの近代史における重要な戦争である日清戦争は、日本人の「国民」意識、民族意識の発展と、日本の国民性に関する論争の展開に大きな影響を与えた。日清戦争勃発以後、戦争の場面と軍人の勇敢さを描いた報道は広く流布し、国民性の優劣に関する文章や著作も多く出版されて、日本人の民族優越意識と「国民」意識が次第に形成された。このような社会背景の下で、日本における国民性に関する論争は新しい社会風潮になったと考えられる。

しかし、日清戦争前後に、日本人は自国国民性を議論したと同時に、中国の敗戦を多く実見したので、対中認識を大きく転換し始めた。終戦後に、日本側の対中認識は「中国否定論」という形で完全に定着した。日本の知識人の同時代中国に対する評判は完全に否定的なものであり、一般民衆の中にも在日中国人に対し「チャンチャン坊主」「チャンコロ」などの蔑称を使用する者がいた。「中国否定論」は、当時の教科書、雑誌、新聞、著作、演劇などの民衆向けメディアにも表れていた。このような社会風潮は、当時の在日中国知識人に大きな影響を与えた。代表人物である梁啓超は、横浜で『清議報』と『新民叢報』を相次いで創刊し、中国人の国民性の弱点や欠点を分析しながら、日本人の国民性の優秀さを宣伝した。彼の文章は中国に流入し、中国の知識人に大きな影響を与えた。このように、当時の日本における国民性に関する論争が、梁啓超の見解や理論と中国における国民性論争の発展に影響を与えたことは明らかである。

このような社会環境の中で留学していた魯迅は、当時の「国民性論争」と「中国批判」という社会風潮などの影響を受けたと思われる。本論文は、当時の日本の社会環境及び日本側の「中国国民性論」に関する著作と、彼の文学創作との関連性を考察することを目的としている。

* サイ シケン 国際文化研究科国際文化専攻博士後期課程
指導教員：新谷 秀明

第1章 弘文時期における魯迅の国民性観

1902年に、21歳の魯迅は国費留学生として日本に留学し、嘉納治五郎を学長とする弘文学院に入学した。1904年に魯迅は弘文学院を退学し、仙台医学専門学校に進学した。魯迅が弘文学院で学んだ2年間は、一部の研究者から「弘文時期」と称されていることに倣い、筆者もこの呼称を用いることにする。

1. 「三つの問題」

魯迅が弘文学院に入学した半年後、許壽裳も入学してきた。魯迅は許壽裳を「35年来の親友」と呼び、許壽裳は魯迅を「生涯の友」と呼び、許広平も2人の友情は「古人の間ではあまり見られない」と絶賛している。この2人の関係は、これまでも詳細に研究され、記録されており、これ以上の説明は必要ない。

許壽裳は、魯迅の弘文時期からの親友として、回想録で何度か弘文時期の魯迅について内容を記録していた。したがって、彼の回想録は、弘文時期の魯迅を研究する上で重要な参考文献となっている。そのうち、『亡友魯迅印象記』、『我所認識的魯迅』で「中国の国民性に関する三つの問題」に関する記述は主に以下のようなものである。

最も理想的な人間性はどういうものなのか？

中国国民性の中で最も欠けているものは何か？

その病根はどこに在るか？¹

このよく知られた記述は、魯迅がすでに弘文時期に、中国国民性を真剣に考え始めていたことを明確に示している。この三つの問題も魯迅が文学生涯をかけて探求し続けた課題である。もちろん、この観点がいきなり出てくるわけではない。魯迅の「国民性」思想が生まれた背景には、さまざまな要因があったはずだが、魯迅が生きた日本社会の影響も当然ながら無視できない。

当時の日本人から見ると、「国民」も「国民性」も、近代化の過程で生まれた新しい言葉であった。当時の国民性論ブームという社会風潮の中で、「国民」と「国民性」は当時の新聞、雑誌や書籍に頻りに登場した。また、これらの言葉は日本語の『太陽』などの雑誌と日常の新聞だけでなく、梁啓超の『清議報』、『新民叢報』、1903年に創刊された『浙江潮』など、中国語で発行される新聞や雑誌でも使われていた。読書好きで本や新聞をいつも買っていた魯迅²から見れば、これらの「国民性」に関する本や言葉に出会ったことは偶然ではなかった。

同時に、弘文学院の学長であった嘉納治五郎の言葉も、魯迅の国家観に影響を与えていた可能性がある。この観点について、北岡正子は『魯迅 日本という異文化の中で』で「魯迅と許壽裳の所謂国民性議論には、嘉納と楊度の議論の直接的波動が認められるのである」³と指摘している。

したがって、魯迅の国民性思想が生まれた背景には、日本側から影響を受けた次の3つの要素があったと思われる。

- ① 日本国内の「国民性論争」の社会風潮。
- ② 在日中国人の文章。
- ③ 嘉納と楊度の議論。

また、この三つの要素も「中国否定」や「中国蔑視」という内容を含んでいる。

当時の日本社会では、自国の国民性に関する論争が盛んに行われていたが、「批判より賞賛が多かった」という事実は無視できない。「我が国の国民性は優れており、その優れた国民性を発揚すれば、我が国は強

¹ 許壽裳『亡友魯迅印象記』、中国文史出版社、2020年、p.24、筆者訳。

² 許壽裳『我所認識的魯迅』、人民文学出版社、1961年、p.21、「三、読書趣味的濃厚」参照。

³ 北岡正子『魯迅 日本という異文化の中で』、関西大学出版社、2001年、p.296。

い国になることができる」のような観点は国民性論争の重要な推進力の一つではないだろうか。これらの文章や観点は、当時の留学生に大きな影響を与えていた。そのため、留学生らも「国民性の卓越が国家の進歩を促す」という認識を持つに至ったのであった。それについて、潘世聖（2002）は以下のように指摘している。

つまり、魯迅が留学した明治日本では、国民性論争は思想文化界で盛んであり、実行の角度から言うと、日本人自身も中国人も、日本の国民性は、明治日本の発展の大きな要因として捉えていた。⁴

「日本人の優れた国民性は、日本が強くなった要因の一つであるが、中国の国民性は優れているか？」このような問題を考えていた留学生たちは、日本側の文章の中ですぐに「中国人の国民性が悪い」というような答えを見つけた。

日本の一般民衆の中国に対する認識は、日清戦争勃発後に大きく変化し始め、終戦後には「中国人蔑視」という点で完全に定着し、中国国民性の欠点がしばしば言及された。文章の中の蔑視とは別に、現実生活中の嘲笑もあった。弘文学院の留学生は依然として日本の子どもたちから「チャンチャン坊主」呼ばわりされていた。⁵すなわち、留学生たちは「日本人の国民性の素晴らしさ」を認識していたと同時に、日本人の中国国民性に対する批判や誹謗中傷さえも受け入れなければならない。このような内容が留学生にショックを与えた可能性を考える必要がある。したがって、日本国内の「国民性論争」の社会風潮が魯迅に与えた影響を、「日本国民性への肯定と賞賛」と「中国国民性への否定と蔑視」の2つ方面に分けて分析する必要がある。その中で、「中国国民性への否定と蔑視」は魯迅が中国国民性を考え始めたことを促す要因でもあった。

しかし、当時の中国国民性に対する分析には、時代的な限界があったと思われる。まず、この時代は中国が常に戦火にさらされていた時代であり、一般民衆が見せた行動が平和時代と同じかどうかは、検討すべき問題である。第二に、当時の中国は、伝統的な意味での漢民族ではなく、満州族（清朝）が支配していた。したがって、当時の日本の色々な文章で批判された中国の国民性の欠点が、清朝の統治や政策がもたらした文明の退歩のために表れたのか、それとも古来「中国」に住む一般民衆の資質だったのか、検討すべき問題であると言える。

三つの問題のうち「中国国民性の中で最も欠けているものは何か?」「その病根はどこに在るか?」について、許壽裳の回想録『我所認識的魯迅』によると、彼と魯迅は弘文学院在学中に結論に達した。

許壽裳と魯迅は、中国国民性の中で最も欠けているものは「誠」と「愛」であると考え、そして根本的な原因は、「我が民族」が2度にわたって異民族の奴隷になったことに由来すると思ひ、そして、救済の唯一の方法は革命であると考えていた。⁶ここで言及された異民族とは、漢民族に勝利して元・清王朝を建国したモンゴル族と満州族のことであろう。したがって、文章に書かれている「我が民族」は「漢民族」のことを指している。つまり、この結論は2人が漢族の立場から述べていたものである。そうすると、弘文時期の魯迅に言及された中国国民性とは「漢族民族性」のことで、漢族の国民性が弱かった原因はモンゴルや満州に支配されたことであろう。このように2人の対話を解釈すれば、魯迅の思想は民族主義を内包していると言えるのではないだろうか。

魯迅の民族主義について、周作人は「当時の豫才の思想は、民族主義に集約されると思う」⁷と述べていた。しかし、「当時の豫才」は1906年に東京に戻った後、「文芸運動」に従事していた時期の魯迅を指して

⁴ 潘世聖「關於魯迅の早期論文及改造国民性思想」、『魯迅研究月刊』、2002年、第9期。筆者訳。

⁵ 許壽裳『亡友魯迅印象記』、中国文史出版社、2020年、p.2参照。

⁶ 許壽裳『我所認識的魯迅』、人民文学出版社、1961、p.19-20参照。

⁷ 周作人『魯迅的青年時代』、『魯迅回憶録・專著(中)』、北京出版社、1999年、p.892。

いることに注意する必要がある。1906年の時期に魯迅が示した民族主義の源泉は、その3年前の弘文時期にあったと思われる。

また、2人が「誠」と「愛」について議論するときを使う「革命」、「奴隸」、「民族」という言葉は、嘉納と楊度の議論に影響されたと思われる。これらの言葉に対する議論も、嘉納と楊度の議論の重要な一部であるからだ。嘉納と楊度の会話の理由と主な内容、そして魯迅と許壽裳の国民性議論に与えた影響については、北岡正子の著書『魯迅 日本という異文化の中で』に詳しく記録されているので、ここでは繰り返さないことにする。しかし、嘉納と楊度の議論が行われたのは1902年末であり、魯迅は1902年末から1903年初めにかけてこの事件の影響を受けた可能性がある。⁸この事件は魯迅の辮髪を切ることに影響を与えたかもしれない。

2. 「辮髪」

ここで満州族が支配した時代背景に触れておきたい。それは、漢民族である魯迅の清朝（満州族）に対する認識が、弘文時期の魯迅の思想を分析する上で考慮しなければならない要素になるからである。満州族と漢民族の間には多くの違いがあり、清朝が中国を支配した後、満州族が漢民族に押し付けた要因も多くあった。そして、最もわかりやすいのが辮髪であろう。普段から一目でわかるし、辮髪を帽子の中に隠しても、帽子が富士山のように高く突き出ているのであった。⁹

魯迅は弘文時期（1903年）にすでに辮髪を切り、江南班¹⁰で初めてそれを行った留学生であったことはよく知られている。¹¹魯迅は「最初に、満漢のけじめをわたしに注意されたのは、書物ではなくて、辮髪であった¹²」と述べたことがある。したがって、弘文時代の魯迅にとって、辮髪を切ることが漢民族の自分と満州族の境界線を引くことだったのか、それとも封建政府に対する反抗心の表れだったのか、両者ともあるのか、いずれかの可能性があると思われる。

歴史的、政治的要因の影響を排除した上で、もっと日常的な視点で考えると、例えば、魯迅は弘文時期に柔道を学んでいた際に辮髪の不便さを感じ、それを切ることを思いついたかもしれない。しかし、嘉納と楊度の議論は魯迅にとって国家、民族、革命の関係を理解する機会となり、魯迅と許壽裳は何度か中国国民性について議論し、結論を出すことができたほどであるゆえに、魯迅が辮髪を切った動機について検討するには民族主義の要素を考慮しなければならない。魯迅の民族主義は日本で生まれ、形成されたものであるので、この時期の日本が魯迅に与えた影響は無視できない。また、日本人の子供による辮髪がある留学生へのいじめ、新聞紙上の中国人の辮髪に関する揶揄などの日本側の要因が、魯迅の辮髪を切るという発想に影響を与えた可能性もあると考えられる。

いずれにせよ、魯迅が日本留学前期（1903年）に辮髪を切っていたことは、もはや議論の余地がない事実であろう。当時の時代背景では、在日の中国留学生が辮髪を切るか切らないかは中国にいた時より自由だったとはいえ、勇気と決断が必要であった。この行動に影響を与えた要因は、非常に複雑と思われる。

魯迅の著作には「辮髪」という言葉が頻繁に登場し、「清朝」と一緒に出てくることが多く、「辮髪」は封建制度と封建制度を死守しようとする人々を揶揄する言葉としてよく使われるようになった。ちなみに、魯迅の作品に「辮髪」が初めて登場するのは、彼が辮髪を切ってから10年後の1913年である。¹³

⁸ 北岡正子『魯迅 日本という異文化の中で』、関西大学出版社、2001年、p.293参照。

⁹ 魯迅「藤野先生」、『魯迅全集』第3巻、学習研究社、1984年、p.169参照。

¹⁰ 北岡正子の前掲書104ページを参照する限り、「江南班」は「浙江班」に所属していた可能性がある。「浙江班」とは、中国浙江省出身の留学生を集めていたクラスである。

¹¹ 許壽裳『亡友魯迅印象記』、中国文史出版社、2020年、p.4参照。

¹² 魯迅「病後雑談補遺」、『魯迅全集』第8巻、学習研究社、1984年、p.217。

¹³ 魯迅の1913年に『小説月報』で発表された作品『懐旧』。

3. 弘文時期における魯迅の文学作品

弘文時期に魯迅が辮髪を切った後に作った文学作品には、『斯巴達之魂（スパルタの魂）』¹⁴、旧詩『自題小像』¹⁵と『説鉦』¹⁶がある。『説鉦』は、科学に関する内容が中心で、国民性については触れていないので、『斯巴達之魂』と旧詩『自題小像』を中心に分析したい。

『斯巴達之魂』は魯迅の最初の文章であり、1903年6月15日と11月8日に雑誌『浙江潮』で発表された。『斯巴達之魂』の中では「死」という漢字が45回出てくるが、ほとんどが「国」と組み合わせられ、「国のために死ぬ」という言葉で現れている。そして、作品の中で兵士は「死」を期待しており、戦場を離れて自国に戦争の現状を届けるかあるいは、血みどろの戦いを生き抜くなど、「死」以外の国に貢献する方法は全部否定した。「死」に反して「生きる」ことは、期待されないことになった。出産を間近に控えた女性が、子供のことを考えずに「夫に国民のために死ぬよう」説得するために自殺した場面も描かれた。このやり方は明らかに人道主義とは対極にあり、後期の魯迅の女性観とは全く相容れないものである。では、魯迅の作品における「死」が人々を魅了する要因は何なのだろうか？その答えは、「名誉」である。国のため、国民のために死ぬというのは、極めて名誉なことである。そして、この意識は兵士の心の中に存在するだけでなく、国家、あるいは国全体が共有している。魯迅は文章の中で繰り返し、上述の国民のために死ぬという行為を直接的に肯定している。したがって、当時の魯迅の思想的傾向、すなわち生死を軽視し、名誉を重んじる姿勢を明確に分析することができる。

魯迅が『斯巴達之魂』の中で、「国のために死ぬ」のような「愛国精神」について強く述べた原因は、日清戦争で、清の兵士は国のために死ぬことを恐れ、日本の兵士は国のために死ぬことを誇りに思っているという記述を得たからであろう。この記述は、日清戦争中の日本側の新聞、演劇や戦後の国民性に関する著作の中で、確かに何度も現れている。そして、梁啓超も『新民叢報』の文章の中で、このような「国のために死ぬ」という精神を述べ、非常に高く評価していた。『斯巴達之魂』は梁啓超の文章の影響を受けたが、日本における国民性論争からの影響も無視できない。

このような、より過激な思想は、彼の詩『自題小像』にも反映されている。特に、詩の最後の一行の「我以血薦軒轅」は魯迅が国のために死のうとする意志と、死ぬことを恐れないという思想を表している。これは、若い魯迅が個人的に「命にかかわる」出来事を経験していないことと関係している可能性もある。

また一方、村田俊裕は『魯迅：「自題小像」詩成立考』の中で、魯迅の『自題小像』の創作が『蘇報』事件の影響を受けた¹⁷と指摘している。1903年、鄒榮は『革命軍』を、章太炎（魯迅の先生）は『駁康有為論革命書』をそれぞれ執筆し、全国的な反響を呼んだ。『蘇報』は『「革命軍」を読む』『「革命軍」序説』『「革命軍」を紹介』などの文章を次々と発表し、皇帝と清朝政府を罵り、革命を神聖な「宝」と呼び、「中華共和国」の成立を求め、『革命軍』を国民が読むべき最初の教科書として推奨していった。また、各地の学生たちの愛国運動も載せていた。これに対し、清国政府は章太炎らを「世に反乱を煽った」「反逆罪」の容疑で逮捕した。その事件について、村田俊裕は以下のように述べていた。

魯迅は『蘇報』事件の報せに大きな衝撃を受け、これを契機に革命人士との交流が深まり、加えて『革命軍』や『駁康有為論革命書』を読む機会を得、その結果、排満革命に生涯をかける決意をし、その決意を『自題小像』詩に表わし、これを写真の裏に記して親友の許寿裳に贈ったものと考えられ

¹⁴ 1903年6月15日、11月8日に『浙江潮』で発表。『集外集』に収録。

¹⁵ 『自題小像』がいつ作られたかは、さまざまな回想録に多くの時期を書かれている。ここで、村田俊裕（1982）の論文「魯迅：「自題小像」詩成立考」によると、『自題小像』は1903年7月から9月22日の間に書かれたもので、これが最も可能性の高い期間である。

¹⁶ 1903年10月10日に『浙江潮』で発表。『集外集』に収録。

¹⁷ 村田前掲論文、p.20。

る。¹⁸

『蘇報』事件は魯迅が『斯巴達之魂』を書いた後、『自題小像』を書く前に起こった事件である。魯迅の「国のために死にたい」という考えは、この間も変わらず、また揺らぐこともなかったことは、事件後に書いた「我以我血薦軒轅」からもうかがえる。

1902年から1903年まで魯迅が体験した国民性に関する出来事を時間順に並べると、次のようになる。

- ① 嘉納と楊度の議論を聞く
- ② 辮髪を切る
- ③ 「三つの問題」、「誠」と「愛」を提起
- ④ 『斯巴達之魂』を書く
- ⑤ 『蘇報』事件を経験
- ⑥ 『自題小像』を書く

このように整理することで、魯迅の革命と民族に対する理解の傾向の変化を把握することができる。①をきっかけに、魯迅は革命と民族を理解し、中国国民性の問題を考え始めたのである。②は魯迅の思想の具体化であり、魯迅が革命に参加する最初の現実的な行動と言える。魯迅が③「三つの問題」について許壽裳と語り始めたのは、②の後であるが、こうした発想の出現は、②より前にあったのだろう。こうした議論を経て、魯迅の革命に参加するという思いはさらに強くなり、その強さは④に反映されている。しかし、この時、魯迅は本当の革命に参加する機会には恵まれなかった。⑤は魯迅に革命に参加する機会を与え、彼の革命の目標をより明確なものにした。そして⑥は、革命に参加しようとした魯迅の意志を示すものである。

革命に参加することは、簡単に決められることではない。「決心」が非常に重要である。『蘇報』事件が魯迅に革命に参加するきっかけを与えたともいえるし、革命に参加することは、魯迅が『斯巴達之魂』で述べているように、「国のために死ぬ」きっかけになったともいえる。魯迅が日本国民性論争から受けた「国のために死ぬ」という思想が、魯迅が革命に参加する決意の精神的な基礎になったとは言えないだろうか。

上述の事件や著作についての考察と分析から、1903年の魯迅の民族意識（満漢意識）と革命意識は以下のように言える。

1903年、魯迅の民族意識の中で、「満州族」と「漢族」とは敵対していた状態である。また、この時期に魯迅と許壽裳が言及した所謂「中国国民性」は、実は「漢族民族性」のことである。『斯巴達之魂』と『自題小像』の中で現れた「国のために死にたい」という魯迅の「愛国」精神とは、漢族が支配している国を愛していることである。すなわち、1903年の魯迅は漢族が再び「国」を導くことができるようになるために、革命に参加することを望み、そのためには死んでも構わないと考えていた。

また、魯迅がこのような意識を持つようになる過程では、彼が置かれていた環境が彼に与えた影響も考える必要があると思う。国民性に関する論争が流行していた明治日本で、民族意識と「国のために死ぬ」という愛国意識は常に宣伝され、注目されていた。1903年の魯迅は「漢族民族性」について議論していたが、魯迅の「国」には「漢族」だけがいるため、それが魯迅の「中国国民性」思想の始まりであったことは否定できない。したがって、日本の国民性に関する論争と魯迅の「国民性」思想との結びつきは、1903年の時点ですでに始まっていたといえる。

¹⁸ 同上、p.31。

第2章 魯迅が著作の中で言及した「国民性論」に関する日本語の著作

魯迅は自身の著作の中で、アーサー・スミス著『支那人気質』¹⁹、安岡秀夫著『小説から見た支那の民族性』²⁰、内山完造著『生ける支那の姿』²¹と中里介山著『日本の一平民として支那及支那国民に与ふる書』²²などの国民性に関する日本側の著作に言及した。本章では、これらの著作に対する魯迅の論述、態度と魯迅に与えた影響を分析する。

1. 『支那人気質』

アーサー・H・スミス (Arthur.H.Smith、1845年－1932年) はアメリカ人宣教師である。彼は清朝末期の中国に20年を越えて滞在し、『Chinese Characteristics』を創作した。1894年に、『Chinese Characteristics』はアメリカで出版され、1896年に、日本人の渋江保によって和訳され、博文館から出版された。また、この著作は1903年²³と1937年²⁴に中国語に翻訳され、中国で出版された。魯迅は『支那人気質』について、「即座支日記」(1926年)、「内山完造『生ける支那の姿』序」(1935年)と「これを証拠に」(三)(1936年)の中で3回言及した。ただし、魯迅は中国語に翻訳された本作を読んでいないと考えられる。というのは、1903年に中国語版が出版された時には魯迅は日本で留学中であり、また1936年10月19日に魯迅が亡くなった際には、1937年出版の翻訳版はまだ世に出ていなかった。魯迅が1936年に「私は、今でも誰かがスミスの『支那人気質』を翻訳してくれないかと希望している」²⁵と述べていることは、このことを裏付けるものであろう。また、彼は「即座支日記」の中で、「この本〔『支那人気質』〕は、日本で二十年前に、『支那人気質』という題名で、訳本が出ている」²⁶と述べている。すなわち、魯迅が読んでいたのは和訳版の『支那人気質』である。

『支那人気質』が日本で出版された1896年頃、日本は日清戦争の勝利に浮かれており、国民性論争も次第に盛り上がっていた。また、この著作の広告も新聞に掲載された。したがって、この著作が当時注目されたことは当然である。『支那人気質』は27章からなり、中国人の国民性の優劣について以下のような目次を掲げて論じた。

体面、儉約、勤勉、礼儀、正確な時間の軽視、正確さの軽視、誤解の才能、婉曲表現の才能、従順にして頑固、知的混沌、無神経、外国人蔑視、公共精神の欠如、保守主義、快適さと便利さに対する無関心、肉体の強靱さ、忍耐力と根気強さ、現状に満足し、楽天的に過ごす、孝行、慈善としての尽、思いやりの欠如、中国社会における「台風」、連帯責任と法に対する畏敬の念、相互不信、誠実さ、「信」の欠如、多神論、汎神論、無神論、中国の実情と中国に今必要なもの。²⁷

魯迅は、『支那人気質』が日本人の中国国民性研究者らに大きな影響を与えたと考えた。彼は「内山完造『生ける支那の姿』序」の中で、『支那人気質』について以下のように指摘している。

¹⁹ アーサー・H・スミス『支那人気質』、渋江保訳、博文館、1896年。

²⁰ 安岡秀夫『小説から見た支那の民族性』、聚芳閣、1926年。

²¹ 内山完造『生ける支那の姿』、学芸書店、1936年。中国語版は『活中国的姿態』、1936年、上海開明書店。

²² 中里介山『日本の一平民として支那及支那国民に与ふる書』、春陽堂、1931年。

²³ 上海作新社出版。日本語訳から中国語に重訳。

²⁴ 潘光旦訳。自著『民族特性与民族衛生』(1937年、上海商務出版社)に収録。英語原版から中国語に翻訳。

²⁵ 魯迅「これを証拠に」(三)、『魯迅全集』第8巻、学習研究社、1984年、p.704。

²⁶ 魯迅「即座支日記」、『魯迅全集』第4巻、学習研究社、1984年、p.368。

²⁷ 『支那人気質』、渋江保訳、博文館、1896年、pp.1-2、目次参照。

明治時代の支那研究の結論は大抵英国の何とか云ふ人の書いた『支那人気質』の結論に影響されたものが多かったらしいが近頃になって面目一新の結論も出て来た。²⁸

魯迅が見た国民性に関する日本側の著作は、『支那人気質』に書かれている内容に似ていた部分があるため、この発想が生まれたと考えられる。ただし、著者のアーサー・スミスは英国人ではなくアメリカ人なので、この点は魯迅が間違っただけで記憶していたのだろう。

『支那人気質』の中でスミスが導き出した最も代表的な結論は、第一章の中国人の「体面」についての考察と考えられる。「体面」について、スミスは以下のように述べた。

故に一たび『FACE』（体面）なる語を正しく理解するときは、則ち支那人最も緊要なる気質の大半を理解することを得べし。何となれば、その管鑰なればなり。²⁹

スミスは、中国人の国民性を研究するために最も重要なことは、中国人の「体面」を理解することだと考えている。この結論には、魯迅も同意見であると思われる。魯迅は1934年10月に、雑誌『漫画生活』で『「メンツ」³⁰について』³¹を発表し、中国の「面子文化」を批判した。しかし、文章の冒頭で、魯迅は「だが、最近、外国人の口から、ときどき、この言葉を聞いた。彼らは研究しているらしい」³²と述べた。アーサー・H・スミスは「外国人」である「彼ら」の中に含まれているだろう。

『支那人気質』が魯迅に与えた影響は、「体面」の章にのみ限定されているわけではない。それについて、范伯群は『支那人気質』の第3章、第4章、第8章と第24章に言及した「中国人の誠」についての内容は、魯迅が弘文学院で「誠」と「愛」という結論を出すことに影響を与えた³³と指摘していた。

先述のように、魯迅は『支那人気質』が中国語に翻訳されていることを知らなかった。魯迅は生前、この著作が翻訳され、多くの中国人がこの本を読むことを望んでおり、逝去する（1936年10月19日）直前にも繰り返していた。

そういう書物を見て、自らを検討し、分析し、その正しい点はどこなのか、はっきりさせ、変革し、抗争し、自ら努力をつみかさねて、他人の寛容と賞讃を求めないこと、それが、中国人とは本当はどういう存在であるか証明する行動である。³⁴

したがって、魯迅は『支那人気質』に対して比較的肯定的な態度を持っていたことがわかる。『支那人気質』は魯迅が留学時代に出会い、生前にも話題になった国民性に関する外国の著作として、最も長く心に残ったものと言えるだろう。

2. 『小説から見た支那の民族性』

安岡秀夫の著作であり、1926年に出版された。魯迅の日記を参考にすると、彼は1926年6月26日に、東

²⁸ 魯迅「内山完造『生ける支那の姿』序」、『魯迅全集』第8巻、学習研究社、1984年、p.302。

²⁹ 『支那人気質』、渋江保訳、博文館、1896年、p.12。

³⁰ 『魯迅全集』第8巻、学習研究社、p.147参照。漢字は「面子」。

³¹ 後に『且介亭雜文』に収録。

³² 魯迅「「メンツ」について」、『魯迅全集』第8巻、学習研究社、1984年、p.147。

³³ 范伯群、澤谷敏行「魯迅与史密斯、安岡秀夫关于中国国民性的言論之比較」、『魯迅研究月刊』、1997年4月、p.37参照。

³⁴ 魯迅「これを証拠に」（三）、『魯迅全集』第8巻、学習研究社、1984年、p.704。

亜細亞³⁵でこの本を買ったこと³⁶がわかる。

安岡秀夫は『小説から見た支那の民族性』の中で、『水滸伝』、『三国志演義』、『西遊記』と『金瓶梅』を含む30冊以上の中国側の著作を参考にして、中国国民性について以下の9点を中心として述べた。

過度に體面儀容を重んずる事、運命に安んじ物事を諦め易き事、氣が長くて辛抱強い事、同情心乏しく殘忍性に富む事、個人主義と事大主義との事、過度の儉約と不正なる金錢慾との事、虚禮に泥み虚文に流るゝ事、迷信の深い事、亨樂に耽り淫風盛なる事。³⁷

安岡秀夫は中国の文芸著作を通じて中国人の国民性を研究した先駆と言えるだろう。アーサー・H・スミスも既にこの研究方法を『支那人氣質』で以下のように紹介していた。

予輩が支那人に対する現時の交通の段階にては、其の生活の状況を知るに三様の法があり。(第一) 其の小説の研究。(第二) 小曲の研究。(第三) 演劇の研究是なり。

したがって、安岡秀夫はスミスの『支那人氣質』を参考にした後に、小説の視点から中国人の国民性を分析したと考えられる。

『小説から見た支那の民族性』について、魯迅は「彼〔安岡秀夫〕はSmithの“Chinese Characteristics”にかなりの信頼をおいているらしく、頻繁に援用している」³⁸、「その中に、いくつかの要点を衝いたものがありますが、むりにこじつけたものも多く、読んでも失笑させられます」³⁹と述べた。それについて、范伯群は「『小説から見た支那の民族性』の第1章と第10章以外、『支那人氣質』と似ている部分が多い。第10章「亨樂に耽り淫風盛なる事」は、ほとんど安岡秀夫の新発見らしい」⁴⁰と指摘している。

ここでは、この2冊の本が互いに参照された可能性があることではなく、魯迅が両方の作品を注意深く読んでいたことを確認しておきたい。

3. 『生ける支那の姿』(中国語版:『活中国的姿態』)

『生ける支那の姿』の著者は、魯迅と親交のあった内山完造である。彼は内山書店の経営者として成功し、日中文化人交流と日中関係の発展に大きな影響を与えた。

1927年10月、魯迅は上海へ拠点を移した後に、内山完造と知り合った。それ以来、2人は深い友情で結ばれ、魯迅も内山書店と非常に緊密な関係になった。1927年10月に初めて内山書店を訪れてから、1936年に亡くなるまで、魯迅は500回以上内山書店を訪れ、1000冊以上の本を購入した。内山書店は、魯迅が本を買うところであっただけでなく、魯迅の作品を流通させる代理店であり、魯迅が国民党の反動勢力の追跡から身を隠すための秘密の住居、魯迅が秘密の客を迎えるための場所、さらには地下党との連絡窓口でもあった。『生ける支那の姿』の序は魯迅が書いたものである。

内山完造は中国に20年間在住し、その様々な経験、真実の生活をもとに『生ける支那の姿』を作成した。この中で、彼は中国人の生活と国民性について記録した。目次は以下のとおりである。

³⁵ 日本人が北京東単に開いていた商店で、日本の書籍の販売も行っていた。

³⁶ 魯迅「日記」、『魯迅全集』第18巻、学習研究社、1984年、p.92参照。

³⁷ 安岡秀夫『小説から見た支那の民族性』、聚芳閣、1926年、p.1。

³⁸ 魯迅「即座支日記」、『魯迅全集』第4巻、学習研究社、1984年、p.368。

³⁹ 魯迅「3310271陶亢徳宛」、『魯迅全集』第15巻、学習研究社、1984年、p.160。

⁴⁰ 范伯群、澤谷敏行「魯迅与史密斯、安岡秀夫关于中国国民性的言論之比較」、『魯迅研究月刊』、1997年4月、p.38参照。

文章文化と生活文化、帮の一つ、小買が割安、生命と権利、三つの根性、一つの習慣、便茶、残飯、も一つの残飯、相互扶助の宴會、人柄が値になる、生活の符號としての文字、株式會社の儲らぬ話、徹底せる實際生活、或る日の商談、支那人は自己主義か、鐘の音、賭博の概念、モスリンの話、料理屋の二色、商品に就いての注意、儉と落、天井の話、木と竹、打込まねばダメだ、福祿壽、綁縹、行詰りが無い話、殉教の話、禮を云ふと親切が消える、勞資協調、支那人生活、針の先と拳骨。⁴¹

このような目次のみを見ると、彼は、自身の中国での生活から見た中国を日本人として読者に紹介しているような印象を受ける。しかし、著作の内容から見ると、内山も中国側に立つ傾向が見られる。例えば、彼は以下のように述べている。

雁がとべば鳩がとぶ、犬の糞までついてとぶ。何時何處の雁が初啼したかしらぬが「支那は未開國」「支那人は未開人」と聲がする。其の聲を聞いた山鳩、家鳩が「未開」「未開」と山から里へ布れ歩いた。それを聞いた路傍の犬までとび出して、一犬虚を吠へれば萬犬實を傳へ、遂に支那人は未開人、支那は未開國、と言ふ極印を押して終った。⁴²

これは、日本にいる中国の研究者の一部を風刺している。また、彼は著作で中国と日本の国民性を比較する際にも、自身の経験から、大陸の環境について「何ものはっきり区劃して視ることはできない」、中国語について「支那語と言ふものが、その発音が不明瞭、内容が非常に大まか」と、苦力について「苦力の気が長い働き」⁴³という「三つの根性」を論じた。当時の「中国否定論」に比べれば、非常に友好的な発言といえるだろう。

しかし、魯迅は親友の内山完造の著作について以下のように評論していた。

支那の優點らしいものをあまりに多く話す趣きがあるのでそれは自分の考へと反對するのである。だが一方著者自身の或る考でやるのだから仕方がない。⁴⁴

魯迅は、内山が著作の中で中国人の優點に言及することに対し、好意的ではなかった。ここにも魯迅の中国人に対する態度が反映されている。魯迅は、文学生涯を通して中国人の国民性を極端に批判し、中国人の国民性の悪い部分を改造させようと考えていた。内山が中国人の長所について語ることを、魯迅が望まない原因は、このような著作が「中国人の虚榮心を増長させる」⁴⁵ことを恐れたためと考えられる。

4. 『日本の一平民として支那及支那国民に与ふる書』

中里介山は日本の小説家であり、1931年に中国に1か月間滞在した後に帰国し、『日本の一平民として支那及支那国民に与ふる書』を執筆し出版した。

中里介山は本書の中で、日本帝国軍の軍事的威信を讃え、日本が中国を侵略したのは「国を救う」と「民生を保護する」のためであると宣言し、日清戦争で中国に侵略したことを美化している。中里介山は中国人の国民性と中華民国政府を批判すると同時に、被侵略国としての中国について以下のように述べた。

⁴¹ 内山完造『生ける支那の姿』、学芸書店、1936年、目次参照。

⁴² 同上、p.11。

⁴³ 同上、pp.20-22参照。

⁴⁴ 魯迅「内山完造『生ける支那の姿』序」、『魯迅全集』第8巻、学習研究社、1984年、p.302。

⁴⁵ 魯迅「270925-1台静農宛」、『魯迅全集』第14巻、学習研究社、1984年、p.332。

正しき意味に於いて、日本が支那を侵略するならば、侵略させて置いたらいかがですか。周も漢も、その他の有ゆる英主は皆その意味での侵略者の資質を持ちました。その意味での侵略を、あなたの国民は皆関係し謳歌して参りました。真に日本にそれだけの力が与へられてゐるとしたならば、周武、漢劉を迎へたやうな心で日本を迎へられないのですか。潮北の元にも清にも、あなたの国は謳歌してゐたのです。天が徳を與へた場合に於いて日本を外にすることはできない筈といつても宜しいのでせう、国家を安んずるの力があつて、民生を保護するの實があつてさへすれば、それを侵略と呼ぶならば、その侵略こそ、いつも、あなたの国の国民が渴望する所の王道でありませう。⁴⁶

魯迅は当然、このような観点を認めない。魯迅は1934年3月1日に雑誌『改造』⁴⁷で「火・王道・監獄」⁴⁸という文章を發表し、第二章「支那の火について」の中で、中里介石の観点に対する反論を行った。

また、中里介石は『日本の一平民として支那及支那国民に与ふる書』の中で、「中国が儒教の国ではなく、徹頭徹尾老子の国であること」⁴⁹を指摘し、「儒教の要旨は支那の風俗の中と支那の国民性の間にほとんど見ることができない」⁵⁰、「支那の国民性の本性が老子的であるから間違いない」⁵¹と主張している。

これが彼自身の分析結果であれば一つの見識と言えそうだが、この結論を発見したのは自分だけでなく、他にもそう思っている人がいることを著作の中で述べている。また、著作の中では結論を述べているだけなので、自分でこの結論に至ったとは言い難く、それに至った過程も比較的弱いため、過去の他者の著作を参考にした可能性もある。

後期の魯迅は、中国の国民性的劣等感の根源のようなものが道教にあるという結論を出しているが、魯迅のみならず同時代の日本の学者の中にも、同様の結論に至るものがいた。例えば、本章第3節で分析する渡辺秀方である。

魯迅は1932年に『日本の一平民として支那及支那国民に与ふる書』を読んだ。⁵²中里介石が創作した「手紙」のような文章に対し、魯迅は「今までそれに対する返事らしいものは未だ一つも見えない」⁵³と述べた。これは、魯迅が、この文章が中国国内ではあまり影響を及ぼしていないことを中里介石と日本の読者に示そうとしたと言えるだろう。

魯迅が雑誌『改造』で發表した「火・王道・監獄」という文章は、ある意味、中里介石の「与ふる書」に対する返事でもあったのだ。残念ながら、魯迅の返事に対して、中里介石はそれ以上の反応をすることはなかった。

第3章 『魯迅手蹟と藏書目録』に記録された「国民性論」に関する日本語の著作

『魯迅手蹟と藏書目録』全3巻は、1959年8月に北京魯迅博物館が整理し、印刷した内部の参考資料である。⁵⁴第1巻は魯迅自身の著作の原稿を収録、第2巻は、魯迅が所有していた中国語の藏書（著作・雑誌）を収録したものである。第3巻には、魯迅が所藏していた日本語、ロシア語、ドイツ語などの外国語図書が収録されている。

⁴⁶ 中里介石『日本の一平民として支那及支那国民に与ふる書』、春陽堂、1931年、p.93-94。

⁴⁷ 日本における改造社の総合雑誌である。社長・創刊者は山本実彦である。

⁴⁸ 漢題は「關於中国的两三件事」（二三の支那の事について）であり、『且介亭雜文』に収録。

⁴⁹ 中里前掲書、p.103。

⁵⁰ 同上。

⁵¹ 同上、p.105。

⁵² 魯迅「火・王道・監獄一二三の支那の事について」、『魯迅全集』第8巻、学習研究社、1984年、p.23。

⁵³ 同上。

⁵⁴ 筆者は九州大学図書館所蔵写しを利用した。

本章では、主に第2巻と第3巻で記録された「国民性論」に関する日本側の著作に注目し、分析したい。第3巻には、本論第2章で既に分析した作品も収録されているが、重複するためここでは繰り返さない。

1. 『中国国民性論』⁵⁵

『中国国民性論』は渡辺秀方著『支那国民性論』（大阪屋號書店、1922）の中国語訳であり、高明によって訳された。魯迅が所蔵したのはこの漢訳版であるため、本書が『魯迅手蹟と藏書目録』の第2巻「中国語藏書」に収録されている。

まず、著者の渡辺秀方と訳者の高明をそれぞれ紹介したい。

(1) 著者と訳者について

渡辺秀方（1867年－1933年）は早稲田大学を卒業した後、哲学科の教員として早稲田大学で教鞭をとった。彼は中国古代哲学・文学の研究に専念し、これに関する多くの著作を翻訳、執筆した。

魯迅や渡辺秀方に比べると、訳者高明の名はさほど知られていない。『魯迅全集』の『「鉄の流れ」校閲後記』と『330301-2増田涉⁵⁶宛』の注釈欄には、高明について次のように書かれている。

高明（1908－？）、江蘇省武進の人。翻訳者。彼の訳した『克服』は1903年心弦書社の出版、署名は瞿然⁵⁷。日本に留学したことがある。⁵⁸

1928年3月、東京に留学していた高明は、初めて中国の雑誌『語絲』で文章「瘋婦」⁵⁹を発表した。高明は文章末尾の附注に「処男作」と書いている。それが、彼の文学生涯の始まりだったといえる。

1928年前後から、『語絲』雑誌社と「創造社」の間に革命文学に関する論争が行われていた。この時期、『語絲』雑誌社の重要なメンバーは魯迅であった。多くの若手作家は魯迅を応援するため、『語絲』雑誌社に寄稿した。そして、高明もその中の一人であった。⁶⁰

『从時代說到無産文学再扯到言論自由』は、高明が『語絲』で発表した2回目の文章である。文章の中で、高明は創造社の創始者であり主要メンバーの一人であった郭沫若の文章『テーブルのダンス』に反論しつつ、国民政府が創造社の雑誌の出版を禁止することを、出版の自由に対する弾圧であるとして批判した。

上述より、この文学論争における高明の立場がわかる。まず、この文学論において、『語絲』雑誌に文章を投稿するという行為と文章の内容の両面から、高明は魯迅を支持することがわかる。第二に、高明が「言論の自由」を重視していたことも明らかである。

高明は他の雑誌社にも寄稿していたが、『語絲』雑誌に掲載されたのは上記の2つの文章だけである。

1929年、高明の漢訳『中国国民性論』が北新書局から出版された。北新書局は『語絲』雑誌の出版社でもある。

魯迅の日記によれば、1928年2月から1929年6月まで、高明と魯迅との間に手紙の往来があったことがわかる。魯迅は日記に以下のように記録している。

⁵⁵ 渡辺秀方著、高明訳。上海北新書局、1929年。

⁵⁶ 増田涉、日本の中国文学者。1931年から、上海で魯迅に師事した。

⁵⁷ 魯迅 「「鉄の流れ」校閲後記」・原注、『魯迅全集』第9巻、学習研究社、1984年、p.447。

⁵⁸ 魯迅 「330301-2増田涉宛」・原注、『魯迅全集』第16巻、学習研究社、1984年、p.505。

⁵⁹ 1928年3月5日に出版された『語絲』第四巻第十期で発表。

⁶⁰ 喬麗華「革命文学論争中の「語絲派」、『上海魯迅研究』、2018年7月参照。

- 1928年2月18日、午後、高明に手紙。
 1928年7月22日、高明より手紙。
 1928年9月13日、高明より葉書。
 1929年4月24日、午前中、高明より手紙。午後、返信。
 1929年6月28日、高明より手紙。
 1929年6月30日、梁惜芳、高明、黄瘦鶴の三人に手紙と原稿を返す。⁶¹

高明の訳作は1929年4月に出版されたため、魯迅が所蔵していた『中国国民性論』は、1929年4月に、高明からの手紙と一緒に魯迅に届けられた可能性がある。

上述の魯迅の日記のもう一つの注目点は、1929年6月30日に魯迅が高明に原稿を返したという点である。この時期、魯迅は既に『語絲』の編集者ではなかった。⁶²したがって、この原稿は、当時魯迅を主要編集者としていた『奔流』⁶³雑誌に掲載を希望した文章であった可能性がある。

『奔流』のもう一人の主要編集者である郁達夫は、『奔流』雑誌の主旨について、「幼稚な青年を少しでも正そうとしたものである」と述べている。

高明の文章が「幼稚」であったためなのか、それとも魯迅が雑誌の出版をやめる準備をしていたのか、いずれにせよ、高明の原稿は魯迅から返却され、発表もされなかった。魯迅の日記から判断すると、これが高明と魯迅の最後の直接的な交流であった。

1931年から、蘇汶らは『現代』雑誌で文章を発表し、魯迅が指導的立場にあった中国左翼作家連盟（略称左連）と文学論争を行っていた。

1932年、高明は「現代書局」に参加し、雑誌『現代出版界』⁶⁴で文章を発表した。⁶⁵

また、高明は『佐藤春夫集について』の中で、「私は現代書局の中で、葉靈鳳⁶⁶と一緒に『現代日本作家選集』を執筆・出版する計画を作った。また、私は『佐藤春夫集』の漢訳を担当する」⁶⁷と述べた。

当時、葉靈鳳と魯迅との関係は非常に悪かった。葉靈鳳は1929年11月に発表された小説『窮愁的自伝』の中で、主人公が魯迅の『呐喊』をトイレトペーパーとして使った場面を描いている。魯迅も文章の中で何回も葉靈鳳を批判し、また、彼を「ゴロツキ画家」⁶⁸と罵倒した。

上述より、1932年以降、高明は魯迅に敵対する陣営に参加し、すでに魯迅と対立する立場に立っていたことがわかる。

高明が『現代出版界』で発表した『狂人魯迅』⁶⁹と『佐藤春夫集について』を参考にすると、『佐藤春夫集』の出版事業はうまく運ばなかったことがわかる。

高明は『佐藤春夫集』を1932年から翻訳した際に、佐藤春夫に連絡し、彼の近影を所望した。この間、魯迅は増田渉に送った手紙（1933年3月1日）の中で、高明の漢訳能力について、以下のように述べていた。

⁶¹ 魯迅『魯迅全集』第18巻、学習研究社、1984年、p.194、p.213、p.219、p.253、p.263、p.264。

⁶² 1929年1月7日に魯迅の編集が終わった。それ以降、『語絲』の編集者は柔石である。

⁶³ 『奔流』は魯迅と郁達夫を主要編集者とする文学雑誌であり、1928年6月20日から1929年12月20日まで、計15期を刊行した。

⁶⁴ 雑誌『現代出版界』と雑誌『現代』は「現代書局」の出版物である。2つの雑誌は、それぞれ異なる内容を含んでいる。

⁶⁵ 高明「佐藤春夫集について」、『現代出版界』第22期、1934年、p.5参照。

⁶⁶ 葉靈鳳（1905年—1975年）、江蘇省南京の出身。1925年、創造社に加入した。後期創造社の重要メンバーである。1928年から現代書局で『現代小説』『現代文藝』などを編集する。

⁶⁷ 高明「佐藤春夫集について」、『現代出版界』第22期、1934年、p.5。

⁶⁸ 魯迅「上海文芸の一瞥」、『魯迅全集』第6巻、学習研究社、1984年、p.120。

⁶⁹ 高明「狂人魯迅」、『現代出版界』第11期、1933年、p.4-5。

高明君は実に言えば文字通りではないのです。一時は頗る書きましたが、此頃は殆んどわすられて居ます。もし佐藤先生の作が此の人に訳されたら或はその不幸は私の井上紅梅⁷⁰氏に遇う事よりも以上だろーと思います。⁷¹

すなわち、魯迅は高明の翻訳能力が低いと評価していた。

増田渉は、佐藤春夫から魯迅を紹介され、魯迅に師事することになった。したがって、増田渉は当然、佐藤春夫と良好な関係だった。増田渉は、上記手紙の内容、すなわち、魯迅が高明の翻訳能力に疑問を抱いていることを、佐藤春夫に伝えた可能性がある。そのため、佐藤春夫は魯迅に連絡した（1933年3月1日から1933年3月9日⁷²の間）。高明の翻訳能力について確認するためであった。魯迅は「高明は高明⁷³ではない」と佐藤春夫に返事した。この後、1933年4月1日、高明は『現代出版界』で『狂人魯迅』を発表し、「迫害狂としての強い名望心を持っていた魯迅」と強く批判した。

このように、魯迅の高明に対する評価や、高明が魯迅を攻撃する文章を見ていたため、佐藤春夫は高明に写真を送らなかった可能性がある。

前述したように、魯迅は高明の翻訳能力が低いとは思っていた。では、実際高明の翻訳能力はどの程度だったか。

1933年に出版された『青年界』雑誌に、趙景深の「高明並不高明」⁷⁴という文章が掲載された。この中で、趙景深は「高明の翻訳作品には間違いが多かった」と述べ、逐一間違いを指摘し、修正・説明した。

したがって、上述より、魯迅は高明が漢訳した『中国国民性論』に言及しなかった原因は、以下の3点があると考えられる。

まず、高明は著作を魯迅に郵送した時期に、魯迅は文学論争の渦中に巻き込まれて多忙であり、さらに、『語絲』雑誌の編集を担当していたために、毎日受け取る膨大な文章や著作の整理に忙殺されていた。したがって、無名の高明の著作は一旦無視された。

1931年、魯迅は文章『「鉄の流れ」校閲後記』の中で、「高明氏訳の『克服』は、実のところ『叛乱』である」⁷⁵と述べていることから、魯迅は高明の翻訳を読んだことがわかる。あるいは、時間がなく十分に読むことができなかつたかもしれない。

次に、1932年から、魯迅と高明の関係がすぐに悪化し、「敵対」と言えるほどの状態になった点である。そのため、魯迅は高明について言及することを忌避した。

最後に、魯迅の手紙の中で述べた通り、高明の翻訳能力が実際に乏しかったことである。

(2) 著作『支那国民性論』について

前述したように、『支那国民性論』の著者である渡辺秀方は、本書の出版後、中国古代哲学に関する著作を多数出版・翻訳していた。彼が本当に注目していたのは、中国古代哲学の研究だったといえるだろう。

この点については、『支那国民性論』の中でも反映されていた。タイトルから見ると、『支那国民性論』は中国国民性を研究する著作であるが、実際には中国国民性を媒介とした中国古代哲学の研究であると思

⁷⁰ 本名は井上進。「支那通」と呼ばれる在野の中国愛好家であった。中国風俗や文化を紹介する多くの著作を出版した。魯迅の作品を和訳したことがある。

⁷¹ 魯迅「330301-2増田渉宛」・原注、『魯迅全集』第16巻、学習研究社、1984年、p.505。

⁷² 1933年3月9日に開催されたあるパーティーで、魯迅は、高明に関する自分の見解を佐藤春夫に伝えたことを話した。1933年3月11日付の『芸術新聞』は、このパーティーと魯迅の発言を報道した。

⁷³ 本論の中で、「高明」は人名であるが、中国語の中で、形容詞としても存在する。意味は「(見解・技術・腕前などが一般水準より)優れている、立派である」である。

⁷⁴ 趙景深「高明並不高明」、『青年界』第3巻第4期、1933年、p.173。

⁷⁵ 魯迅「「鉄の流れ」校閲後記」、『魯迅全集』第9巻、学習研究社、1984年、p.438。

われる。『支那国民性論』の序文を書いたのは牧野謙次郎であった。牧野謙次郎は日本の漢学者であり、『莊子』、『墨子』や『戦国策』などの中国古代哲学を研究する著作を執筆・出版した。これにより、『支那国民性論』が主眼としているのが、中国古代哲学であることを側面から推測することができる。

『支那国民性論』は天命、孝道、文弱的和平主義、実利性、自利心、保守、趣味性、矛盾性などの面に注目し、中国国民性を論じる。著作の中で、渡辺秀方は中国国民性が現れた歴史文化原因を論述するため、『論語』、『老子』、『莊子』、『墨子』と『易』などの中国古代哲学著作を分析しながら、『三国志演義』、『水滸伝』、『西遊記』などの文学作品と『孔雀東南飛』⁷⁶、『兵車行』⁷⁷などの古典詩を引用した。したがって、渡辺秀方が引用した参考作品は非常に古い作品であると言える。

また、この著作の中で、渡辺秀方は以下のような内容を述べた。

長髪賊の乱でも、最近の義和団でも、悉く外人の威力に依って、辛らく鎮定した次第である。⁷⁸

「義和団」の乱とは、1900年に起きた動乱である。すなわち、この著作を創作した時期は出版時期である1922年の20年程前であろう。渡辺秀方が『支那国民性論』を書いたのは1900年前後だが、本書で引用されている「義和団」のような「新しい事件」については他にほとんど書かれず、秦の始皇帝など中国古人の例への言及が多かった。

『論語』、『老子』のような著作は、まだ漢民族がモンゴル族や満州族に侵略されていない時代に創作されたものである。したがって、このような古書資料を参照していた渡辺が推論した中国国民性に関する結論は、漢族民族性に近いものとなったのである。この角度から言うと、中国国民性の問題の根源を探求する際に、この著作は重要な参考意義があると思われる。

前文では、弘文学院時代の魯迅の「国民性思想」を分析し、その時期から、魯迅が議論していた「中国国民性」は、実は「漢族民族性」であるという結論を出した。そうすると、『支那国民性論』の中で渡辺秀方が議論していた「漢族民族性」と、魯迅が認識していた「中国国民性（漢族民族性）」とは、同じ観点があるのだろうか。

2. 『歡樂の支那』と『支那文化の研究』

『歡樂の支那』と『支那文化の研究』は後藤朝太郎の著作である。彼は言語学者であり、「支那通」として当時の日本で知られていた。後藤は中国語に多大な関心を持ち、中国語を研究するために中国に何回も行った。

言語学者としての後藤朝太郎は、中国で中国語を研究した際に、次第に中国文化と中国人の国民性に強い関心を持つようになった。それは、彼の世に出した書籍の変化にも表れていた。後藤は生涯で約126冊の本を出版した。1906年から1916年までに、彼は『言語学』（1906）、『現代支那語学』（1908）、『漢字音の系統』（1909）、『文字の起源』（1916）などの言語学に関する著作を14冊執筆し、出版した。

1918年、後藤は『支那の文物』を出版した。タイトルから見ると、『支那の文物』は中国の文物に注目しているように見えるが、実は中国の文物を通じて中国人の生活、社会文化、国民性などを解説するものである。『支那の文物』は中国の文字、書道、貨幣、装飾品、北京の紫禁城、山東省や泰山などの文物など、中国文化についても詳しく紹介している。『支那の文物』は後藤が中国社会・文化に目を向け始めた最初の著作といえる。その後、後藤は『支那文化の解剖』（1921）、『支那料理の前に』（1922）、『歡樂の支那』

⁷⁶ 六朝時代（222年－589年）の長編叙事詩。

⁷⁷ 唐代の詩人、杜甫の作品。

⁷⁸ 渡辺秀方『支那国民性論』、大阪屋號書屋、1922年、p.70。

(1925)、『支那国民性講話』(1927)、『支那社会民情』(1930)、『支那の体臭』(1933)などの中国社会、文化、国民性に関する多くの著作を出版した。

これらの著作は中国人の国民性を分析しただけではなく、日中両国の国民性を比較研究する内容もある。さらに、後藤は中国に友好的ともいえる態度で、日本人に中国を紹介していた。後藤は彼の中国文化に関する最初の著作である『支那の文物』の中で、日本人が見習うべき中国人の国民性がある⁷⁹と述べた。また、『おもしろい支那の風俗』の序の中で、後藤は以下のように述べた。

自分はこの意味からして、料理、風俗、趣味の姉妹篇を公にして多少なりともその間〔中国と日本の間〕の緩和剤に資したい積もりである。⁸⁰

このように、中国人の国民性の優秀さを宣伝しながら、日中両国の関係を緩和したいという論調は、後藤朝太郎の中国文化研究に従事した生涯で一貫していた。このような論調は、当時の日本で主流であった中国に対する批判的態度とは異なるものと思われる。

『歡樂の支那』と『支那文化の研究』は『魯迅手蹟と藏書目録』の中に記録されているので、魯迅はこの2冊の本を読んだはずである。

『歡樂の支那』は1925年3月に北隆館から出版された著作である。後藤は『歡樂の支那』の中で、当時の中国社会の現状と、中国人の生活の歡樂の一面をまとめ、紹介している。後藤は自分の経験に基づいて、中国の料理、詩酒琴書、麻雀、手品などの物、江南、南京、揚州などの都市、芝居、庭園、茶館などの場所、祭祀に関する風俗について、詳しく記録していた。ただし、後藤は当時の国際的、社会的環境の中で、依然として歡樂の中国人と、「歡樂本位」の中国を批判することはなかった。

『支那文化の研究』は1925年6月に富山房から出版された著作である。この中で、後藤は「支那文化の研究モットー」を書き、以下の内容を述べた。

行詰まれる日本の此のいらいらした情弊多き現状を開展せしむるには政府筋や政黨屋などばかりを當てにせず國民自ら目醒めて大きく支那南洋北亞にと目を転ずべきである。殊に日本の常識や推測で行かぬ支那の事に対しては最も重を支那民族性におき先づ其の生活文化の向上の闡明に深き趣味を持って進むことが何より肝腎である。⁸¹

このような中国と日本に対する論述の態度は、当時としては非常に珍しいと言えるだろう。

『支那文化の研究』は「天篇」、「地篇」と「人篇」という3つの部分からなる。各部分の注目点は以下のように述べられた。

天篇には主に支那文化本来の性質、状態及び其観察法を叙述し、地篇に於いては支那大陸各地の山川、史的的古蹟及び各省視察游歴の迹を陳べ、人篇に入っては上述二方面の智識を基として、吾人は如何にせば支那文化のスピリットを理解し得るや、又其支那らしい氣分の味ひ方、支那民族との接觸の方法などを主として、實際方面の心理問題に及んで居るのである。⁸²

『支那文化の研究』は、『歡樂の支那』と同様に、後藤の旅と観察に基づき、中国文化の紹介と中国人の

⁷⁹ 後藤朝太郎『支那の文物』、科外教育業書刊行会、1908年、pp.56-57参照。

⁸⁰ 後藤朝太郎『おもしろい支那の風俗』、大阪屋號書屋、1923年、p.2。

⁸¹ 後藤朝太郎『支那文化の研究』、富山房、1925年、「支那文化の研究モットー」。

⁸² 同上、pp.75-756。

性格と思想などに対する分析が行われている。しかし、後藤はこの著作の最後に、支那文化研究に関する結論を8点にまとめた。結論の中で、彼は中国文化をよりよく研究する方法を説明し、さらに、自国と学者に要望を提出し、日本が自らを反省するべきであることを示唆している。

後藤朝太郎について、魯迅は以下のように述べた。

後藤朝太郎は「支那通」の名がありますが、実際は浅薄で、現在、日本でも読者はなくなっているようです。⁸³

上記の言葉は、魯迅が後藤朝太郎のこの2作を高く評価していなかったことを示している。

魯迅の「浅薄」に対する定義がどのようなものであったかを知ることはできないが、この一連の中国国民性に関する著作を分析することによって、魯迅のこうした著作に対する一般的な態度を見ることはできるだろう。

まず、魯迅は『中国国民性論』のように、中国の国民性の弱点や欠点を指摘できる著作を支持した。しかし、魯迅は『生ける支那の姿』（内山完造）、『支那文化の研究』のように中国の国民性、あるいはその中の一部を賛美するような作品には反対である。さらに、自分の親友の著作に対しても、魯迅はやはりこの態度を改めようとはしなかった。

内山完造と後藤朝太郎は中国低層民衆に注目し、中国社会を観察し、中国国民性に関する著作を創作した。それは両者の共通点と言えるだろう。しかし、両者の間には、明らかな違いがあると思われる。内山完造は中国で生活し、自分の生活経験に基づいて著作を創作した。それに反して、後藤朝太郎は何回も中国へ「旅行」し、自分の「旅行体験」に基づいて著作を創作した。両者を比較すると、それぞれに強みがあることがわかる。

内山完造は長い時間をかけて中国で生活し、より詳細に見ることができるようになったが、その地域的な幅は限られたものであった。後藤朝太郎はツアー感覚で中国各地を訪れ、より広い範囲を観察したが、時間の関係で特定の地域に長く滞在できず、現地の状況をより深く観察・研究することができなかったのかもしれない。魯迅が後藤朝太郎を「浅薄」だと感じた背景にはこのような事情があったと考えられる。

第4章 魯迅の「国民性」思想と日本側の中国国民性研究の比較

本章では、主に魯迅の中国国民性認識と日本側の中国国民性認識に関し、結論、目的、表現方法などの面から、比較を行いたい。

1. 中国国民性に関する結論

魯迅は『内山完造「生ける支那の姿」序』の中で、「これも自分の発見でなく内山書店で漫談を聞いて居たときに拾ったものだが日本人程結論を好む民族、即ち議論を聞かうが、本を讀まうが若し遂に結論を得なかつたらどうしても氣がすまない民族は、今の世の中に頗る少ないらしいと云ふことである」⁸⁴と述べているように、本論で言及した日本語の中国国民性に関する著作の中で中国国民性に関する「結論」を明確に提出することが常識であった。

それに反して、魯迅は生涯で中国国民性に注目して分析していたが、彼自身は中国国民性に対する「結論」のようにまとめることをしなかった。したがって、魯迅の作品に示された中国国民性の特徴

⁸³ 魯迅「3310271陶亢徳宛」、『魯迅全集』第15巻、学習研究社、1984年、p.160。

⁸⁴ 魯迅「内山完造『生ける支那の姿』序」、『魯迅全集』第8巻、学習研究社、1984年、p.302。

をまとめることは、比較する前の最も重要なステップとなる。

まず、魯迅が中国国民性の欠点や弱点について最も早く指摘したのは、弘文時期に提出した「誠と愛の欠けること」（傍点筆者、以下同様）であろう。また、これとともに述べられた、「誠と愛の欠ける」理由である2度奴隷になった経験も、中国の国民性の中の「奴隷性」が生じる原因になった。これが、魯迅がまとめた中国国民性の特徴の2点目である。魯迅は多くの著作の中で「奴隷性」に対する批判を行った。例えば、『阿Q正伝』、『利口な人とバカと奴隷』、『灯下漫筆』、『漫与』などである。

3点目は「観客心理」である。魯迅の作品の中では、「観客」のイメージがよく言及され、中国人の「観客心理」がいつも批判された。魯迅は『ノラは家を出てからどうなったか』の中で、中国の大衆について、以下のように評価した。

大衆一とりわけ中国の大衆は、一永遠に芝居の観客であります。犠牲が登場して、悲壮な演技をすれば彼らは悲劇を見たことになり、おどおどと演ずれば彼らば喜劇を見たことになるわけです。⁸⁵

魯迅は『示衆』、『薬』、『孔乙己』、『風波』などの著作の中にも、「観客」のイメージを作り出し、このような中国人の「観客心理」を批判した。

中国国民性の4点目の特徴は、中国人の「中庸思想」である。中国人が中庸思想を身につけたのは、中国の伝統的な儒教の影響であることは間違いないと思われる。中国人の中庸思想について、魯迅は以下のように評価した。

私は、この二つの態度〔成り行き任せと中庸〕の根本は、おそらく、惰性というだけではすまされないものであり、それは実は卑怯なのだ、と思います。強者に出会えば、反抗する勇気がなく、「中庸」などという言葉をもってきてごまかし、いささか自らを慰めておくのです。⁸⁶

魯迅は、中庸のために中国人に生じる事についても説明した。例えば、1926年に魯迅は香港で講演を行った際に、「中国人の性格は、何より調和や折衷を好みます。たとえば、この部屋は暗すぎるから、ここに窓を一つつくろう、と言っても、人々は絶対に許しはしません。けれども、もし屋根をぶっこわせ、と主張したならば、彼らはすぐに調和をはかって、窓をつくることに賛成するでしょう。より激烈な主張がないかぎり、彼らはおだやかな改革すら実行しようとはしないのです」⁸⁷と話した。

5点目は、改変が嫌いであるため、改革が難しい（保守的）という点であると思われる。これは、自らの思想や生活方式の改変を厭うだけでなく、他人の改変に対する嫌悪にも表れている。思想の面で、魯迅は、中国人が古人の思想を敬うあまり、改革することに消極的だと考えていた。思想を変えようとしなければ、当然、生活方式も変えられない。例えば、中国の皇帝は「風水」を壊したくないので蒸気機関車を使うのを毛嫌いし、中国の伝統的な知識人は中国の伝統的な文言文を手放したくないので白話文（現代中国語）を使うのを忌避した。中国では、改革は非常に難しいことで、中国の近代化の妨げにもなっていた。同時に、このような環境で「平等意識」が強く、人の上に立つために自己改革を行うこと、すなわち、平等から脱却することは、非常に困難である。中国国民性の特徴の6点目である。これについて、魯迅は以下のように述べた。

⁸⁵ 魯迅「ノラは家を出てからどうなったか」、『魯迅全集』第7巻、学習研究社、1984年、p.226。

⁸⁶ 魯迅「往復書簡」、『魯迅全集』第4巻、学習研究社、1984年、p.39。

⁸⁷ 魯迅「声なき中国」、『魯迅全集』第5巻、学習研究社、1984年、p.208。

中国は、時々きわめて平等を愛することがある国柄だ、とわたしは思う。何か、少し突出したものとあると、誰かが、刀で削って平らにしてしまうのだ。⁸⁸

『狂人日記』の中でも、現状に反抗し、自らの思想を改変しようとした狂人は、「治療」や迫害を受けた末に、結局「すでに全快し、候補⁸⁹として某地に赴いた」。⁹⁰

また、改変を嫌うという思想には、「排外思想」も隠れている。この排外は、新しい事物に対する拒絶反応として反映される。新しい事物を学ぶときでも、新しい事物を使う目的は「古い物」を守ることである。このような排外思想について、魯迅は以下のように述べた。

維新をして中国が富強になったら、この学びとった新を使って、外来の新を追い出し、門を閉めて鎖国し、もう一度、守旧に転じよう。⁹¹

言い換えれば、つまり、外国の技倆を学んで、中国の旧習を保存するということだ。技倆は新しくなければならず、思想は旧くなければならない。⁹²

7点目は、中国人は現実よりも未来に希望を託すことである。

1925年、魯迅は許広平に送った手紙の中で、「わたしのみるところでは、あらゆる理想家は「過去」を懐かしがるか、でなければ「将来」に希みをかけるかであって、「現在」という問題についてはみな白紙解答です。誰も処方を出せないからでしょう。そのなかで、もっともよい処方が、つまり、いわゆる「将来に希みをかける」というやつです」⁹³と述べた。

8点目は、男尊女卑である。

魯迅は「薬」、「祝福」、「風波」などの小説を創作し、華大媽（「薬」）、呉媽（「阿Q正伝」）、豆腐西施（「故郷」）、祥林嫂（「祝福」）などの女性人物を作り出した。これらの小説の中で共通しているのは、女性たちが封建社会で自覚せず奴隷として生きていることだ。女性の実存的ジレンマは、具体的には2つの形で現れている。第1に、家父長制社会では、女性の社会的地位は低く、男性のルールによってあらゆる面で制約を受ける。第2に、女性の思想は依然として中国の伝統的な思想に影響されており、「改革」を展開することができないでいる。

上述の点のほか、魯迅は、懦弱、利口、偽善、忘却、自己欺瞞、臆病などの中国の国民性の特徴を批判していた。魯迅は、前述した中国人の国民性をその生涯において何度も批判し、文学作品の中では国民性的一面だけを批判することはなかった。魯迅が中国の国民性について書いた数多くの著作の中で、『阿Q正伝』は最も重要であると言えるだろう。

『阿Q正伝』は1921年12月4日から1922年2月12日まで『晨报』に連載され、後に『呐喊』に収録された。この著作は魯迅唯一の中編小説である。ロシア語訳『阿Q正伝』の序の中で、魯迅は「書くには書いてみたものの、わたしがほんとうに、現代のわが国の人々の魂を描くことができたかどうか、結局のところ、自分にはまだ、しかとした自信がない」⁹⁴と述べた。

魯迅は『阿Q正伝』の中で、「わが国の人々」の国民性を批判していた。同時に、著作の中で現れた「精

⁸⁸ 魯迅「徐懋庸『打雑集』序」、『魯迅全集』第8巻、学習研究社、1984年、p.326。

⁸⁹ 官僚任用を待つ者。

⁹⁰ 魯迅「狂人日記」、『魯迅全集』第2巻、学習研究社、1984年、p.19。

⁹¹ 魯迅「随感録四十八」、『魯迅全集』第1巻、学習研究社、1984年、pp.416-417。

⁹² 同上。p.417。

⁹³ 魯迅「兩地書」[19250318致許広平]、『魯迅全集』第13巻、学習研究社、1984年、p.29。

⁹⁴ 魯迅「ロシア語訳『阿Q正伝』序および著者自叙伝略」、『魯迅全集』第9巻、学習研究社、1984年、pp.113-114。

「精神勝利法」は、魯迅が提起した中国国民性に関する観点の中で、最も代表的な結論と言えるだろう。精神勝利法は、『阿Q正伝』の中で、主人公である阿Qの心理活動の方式の一種であり、具体的には、傲慢さ、自己卑下、弱い者をいじめて強い者を恐れる、無神経さなどに反映されている。阿Qの身には中国国民性の悪い品性が集まり、中国国民性を反映した代表人物となった。

上述のように、魯迅が著作の中で示した中国人の国民性の主な特徴は次のとおりである。

誠と愛の欠けること、奴隷性、観客心理、中庸思想、改革が難しい（崇古）、排外思想、未来に希望を託すこと、男尊女卑、精神勝利法と懦弱、利口、偽善、忘却、自己欺瞞、臆病などである。

魯迅の中国国民性認識と日本側の中国国民性認識を対比し、中国国民性の結論の面から言うと、魯迅の中国国民性批判は、「完全批判」と言えるだろう。また、魯迅は中国国民性の男尊女卑意識と精神勝利法に特別に注目していた。

2. 中国国民性に注目する目的

魯迅の著作の中で言及された日本語の著作が中国国民性に注目する目的は、4つがあると考えられる。まず、自国の人々に中国を紹介したいということである。第二に、中国人をより理解したいという意図がある。第三に、中国の国民性を軽蔑し、中傷することで、日本人の自信を高め、民族の優越感を強化したいという考えがある。最後に、中国の野蛮さや後進性を描写することで、日清戦争を正当化し美化したいことである。これは、当時の日本の社会環境だけでなく、大アジア主義の登場と広まりとも密接な関係があると言えるであろう。

それに対し、魯迅は中国国民性に注目し批判する目的は、中国国民性を改造することである。この目的は、魯迅の文学生涯を通じて貫かれていたと言える。

魯迅は、こうした自分の弱点や欠点を書いた著作を読むことで、中国人が自分の弱点や欠点をよりよく認識し、それを改善できるようになることを希望していた。したがって、魯迅は中国人の良さを議論する作品を嫌悪していた。また、魯迅は自分で中国国民性を批判する著作を創作しただけでなく、中国の国民性を描いた良い著作に出会ったら、それをより多くの中国人に読んでもらいたいと考えていた。例えば、『支那人気質』である。

一方、魯迅は著作の中の見解に誤った観点があることに気付いた。

例えば、満州事変の3年後、中里介石の「中国人は自信を喪失した」という観点に対して、魯迅は「中国人は自信を喪失したのか」を創作し、は以下のように反論した。

我々には、古代から、没頭して苦闘を続ける人物がいる。生命懸けで頑張り続ける人物がいる。民衆のため生命をささげる人物がいる。身を捨てて真理を求めた人物がいる……帝王、将相のために作った家系図同然のいわゆる「正史」であっても、しばしば彼らの光輝は、覆いかくせなかった。それが、中国の背骨である。

そういう人々が、現在でも少なくなっているはずはない。彼らは確信し、自己を欺かない。彼らは、一人が倒れるや他の者が加わって戦い続けており、だが、一方ではつねに傷つけられ、抹殺されて、暗黒の中に消滅し、人々に知られないだけである。⁹⁵

3. 中国国民性の表現方式

日本側の中国国民性に関する著作の表現方式は、主に「現象＋結論」である。すなわち、著者はある現象を見た後、著作でこの現象を説明し、結論を導き出す。一般的には、著者は一節で「現象」を一つ述べ、

⁹⁵ 魯迅「中国人は自信を喪失したのか」、『魯迅全集』第8巻、学習研究社、1984年、p.138。

「結論」を一つ出す。全書を何節かの内容で組み合わせ、最後の節で全部の結論をまとめ、「最後の結論」を出す。

一方、魯迅は中国国民性に関する多くの著作を創作したが、一般的には、一部の作品の中で何点かの国民性の特徴に言及した。魯迅は雑文と小説の中で「現象」を出したが、「結論」のようなものを導き出さなかった。「結論」は、読者あるいは研究者自身で導き出す必要がある。

また、日本側の著作は「紹介」に注目し、表現方式はより直接であり、著作の観点ははっきりしている。これに対し魯迅は国民性を批判しながら、文学の芸術性にも注目した。したがって、読者は魯迅の観点を理解するために、著作を「分析」しなければならない。

終わりに

国民性とは、国民共通に見られる気質であると思われる。国民性の生成は、国民が住む国家や社会、環境と密接に関係している。

本研究では、「国民性論」が流行していた日本社会と「中国国民性論」に関する著作と魯迅の国民性思想との関連性について検討した。

魯迅は、文学生涯において「中国人の精神を改造すること」という思想、すなわち、「中国国民性を改造する思想」を一貫し、多くの作品を創作した。この過程の中で、日本側の「国民性論」からの影響は無視することができないと思われる。

魯迅の日本留学時代は、まさに「国民性論」が流行していた時代であった。印刷技術の発展、読書社会の形成、新聞紙の流行、言論の自由、戦争の勝利などの要因によって、「中国国民性に対する批判」が社会で大きな話題になった。魯迅はこのような日本で学び、中国の国民性を反省し始めた。

魯迅の「国民性思想」の啓蒙時期から、日本側の影響を受けていたことがわかる。さらに、魯迅は「国民性改造」を目的としての文学生涯の中で、日本側の中国国民性に関する著作に常に興味を持っていた。魯迅の著作の中で言及された日本語の中国国民性に関する著作は多くなかったが、彼が読んだと言及していない作品が存在する可能性も十分にある。例えば、李冬木は周作人が購入した書籍を魯迅も読んでいるはずと推測している。⁹⁶そして、魯迅は逝去の直前も、日本語の『支那人気質』をより多くの中国人に見てもらいたいと希望していた。

その時代、日本側の学者は幅広い面で中国国民性を分析していた。魯迅自身は人生経験が豊富で、知識量も極めて多いため、これらの観点を分析し判断することができた。これは誰もができることではない。

魯迅は、中国国民を観察しながら、日本側で指摘された中国国民性の弱点や欠点を受け入れたが、それを急いで表現することもしなかった。その代わりに、彼は白話文で多くの作品を創作し、それらの弱点や欠点を文学作品という形で中国社会に広めた。また、魯迅は子供時代から、中国の伝統的な知識を勉強し、「伝統」の社会で生活を送っていた。さらに、魯迅の子供時代の色々な体験も、彼により多くの「国民」と触れ合う機会となった。これらの経験や体験は、魯迅も作品の題材にした。そのため、魯迅の著作はより鮮明でリアルなものとなっている。

これらの著作の中に、魯迅の「名作」とされるものが多いと言えるであろう。また、現代の中国や日本では、これらの作品の研究は途切れることなく続けられている。

⁹⁶ 李冬木「明治時代における「食人」言説と魯迅の「狂人日記」、『文学部論集』96、佛教大学文学部、2012年、pp.103-126 参照。

主要参考文献

許壽裳『亡友魯迅印象記』、中国文史出版社、2020年。

許壽裳『我所認識的魯迅』、人民文学出版社、1961年。

『魯迅手蹟と藏書目次』、北京魯迅博物館、1959年。

魯迅『魯迅全集』、学習研究社、1984年。

北岡正子『魯迅 日本という異文化の中で』、関西大学出版社、2001年。

藤井省三『魯迅 東アジアを生きる文学』、岩波書店、2011年。

金山泰志『明治期日本における民衆の中国観：教科書・雑誌・地方新聞・講談・演劇に注目して』、芙蓉書房、2014年。

アーサー・スミス『支那人気質』、渋江保訳、博文館、1896年。

安岡秀夫『小説から見た支那の民族性』、聚芳閣、1926年。

内山完造『活中国的姿態』、上海開明書店、1936年。邦題は『生ける支那の姿』、学芸書店、1936年。

渡辺秀方『支那国民性論』、大阪屋號書屋、1922年。

中里介山『日本の一平民として支那及支那国民に与ふる書』、春陽堂、1931年。

後藤朝太郎『支那の文物』、科外教育業書刊行会、1908年。

後藤朝太郎『おもしろい支那の風俗』、大阪屋號書屋、1923年。

後藤朝太郎『支那文化の研究』、富山房、1925年。

范伯群・澤谷敏行「魯迅与史密斯、安岡秀夫关于中国国民性的言論之比較」、『魯迅研究月刊』、1997年4月。

李冬木「明治時代における「食人」言説と魯迅の「狂人日記」」、『文学部論集』、佛教大学文学部、第96号（2012年3月）。

村田俊裕「魯迅：「自題小像」詩成立考」、『信州大学人文科学論集』巻16、1982年。

石川泰成「後藤朝太郎の日中民族性比較論：ある支那通の日本人批判」、九州産業大学国際文化学部紀要22、2002年8月、pp.47-69。

リディア・リウ「国民性を翻訳する：魯迅とアーサー・スミス」、中里見・清水訳、『言語文化論究』23、九州大学大学院言語文化研究院、2008年、pp.195-232。

樽本照雄「魯迅「斯巴達之魂」について」、『清末小説』(22)、1999年、pp.1-19。